

【視察調査報告書】

会 派 名	立憲民主・市民の会
参 加 議 員	【議員】 5名 安藤 修三、小林 裕恵、森 喜彦、九鬼 ともみ、浜野 正太
日 程	令和8年（2026年）1月14日（水）～令和8年（2026年）1月16日（金）
詳 細	
視察日及び視察先	1月14日（水） 熊本県玉名市
視 察 内 容	観光振興の取組について
概 要	<p>玉名市は人口約6万2千人の地方都市で、毎年人口減少が続いている。市内には玉名温泉・小天温泉といった温泉地があり、かつては三池炭鉱の繁栄とともに宴会型観光地としてにぎわったが、現在は旅館の廃業や事業承継の問題などにより、観光地としての存在感は必ずしも高くない状況にある。</p> <p>こうした中、玉名市では観光を地域政策の柱と位置付け、2019年のNHK大河ドラマ「いだてん」の主人公・金栗四三を地域資源として生かす観光戦略の再構築に取り組んできた。一過性のブームに終わらせることなく、金栗四三の功績や精神を核に、「スポーツ」「ウェルネス」「教育」の三つを柱とする、いわゆる「玉名型3つのツーリズム」を展開している。</p> <p>スポーツツーリズムでは、「金栗マラニック(マラソンとピクニックを組み合わせさせた造語)」や「スイーツマラニック」など、市内を回遊する参加型イベントを実施し、市外からの参加者を呼び込み、市内消費や宿泊需要の創出につなげている。ウェルネスツーリズムでは、九州看護福祉大学と連携した健康増進プログラム等を実施し、教育ツーリズムでは、筑波大学とのオンライン授業や海外自治体との交流などを通じ、地域の学びと交流の機会づくりを進めている。</p> <p>観光客数はコロナ禍からの回復基調にあり、インバウンド客も増加傾向にある。玉名市では、交通の利便性という立地条件も生かしながら、滞在型・回遊型観光への転換を目指した取組を進めている。</p>
所 感 等 (意見・課題・本市への反映など)	<p>玉名市の観光施策で特に印象に残ったのは、「有名な観光地が少ない」という状況を踏まえ、大河ドラマ「いだてん」をきっかけに注目された金栗四三という人物を、まちづくりの軸に据えている点である。</p> <p>金栗マラニックやスイーツマラニックのように、市内を歩いて回る仕組みをつくり、参加者が市内のお店に立ち寄ったり、宿泊したりする流れを生み出している点も、とても現実的で参考になる取組だと感じた。最初は行政が中心となって始めた取組だが、少しずつ店舗関係者など民間主体へと移行しつつあるとのことである。一方、ウェルネスツーリズムは思ったように参加者が集まらなかったとのことで、今後は対象を中高年に絞らずメニューを設けるなどのブラッシュアップを図っていくという説明があり、試行錯誤を重ねながら改善を続</p>

けていく姿勢が印象的であった。
スポーツや学び、自然、地域の歴史や人といった身近な資源をどのように生かし、どのようにつないでいくのかという視点は、今後の本市のまちづくりや交流施策を考えるうえで、重要な示唆を与えるものであると感じた。

視察の様子



玉名市役所 議場にて

詳 細	
視察日及び視察先	1月15日(木) 熊本県熊本市
視 察 内 容	上下水道インフラ及び災害対応における取組について
概 要	<p>熊本市は「水の都」と呼ばれ、上水道用水の100%を天然地下水で賄う全国的にも特徴的な水道事業を有している。下水道の普及率は約91%で、敷設された下水道管の延長は2,745Kmに達し、安定した上下水道サービスの提供が行われている。</p> <p>熊本市上下水道局では、平成28年(2016年)の熊本地震発生直後の応急給水や復旧対応、受援体制、情報伝達のあり方などについて過程を整理し教訓や課題をまとめた「熊本地震からの復興記録誌」を発行し、こうした検証を踏まえ、災害時においても上下水道機能を維持・早期回復できる体制の構築を重要な方針として、現在の事業運営や体制整備に反映させながら、災害に強い上下水道事業の構築に取り組んでいる。</p>
所 感 等 (意見・課題・ 本市への反映など)	<p>熊本市上下水道局の説明を伺い、強く感じたのは、熊本地震の経験を「過去の出来事」として終わらせるのではなく、その時に何が起き、何がうまくいかなかったのかを丁寧に振り返りながら、現在の体制づくりに着実に反映させている点である。</p> <p>当時は、市民・マスコミからの問い合わせや断水・漏水情報が殺到し、本来は現場に出るべき職員が電話対応に追われるなど、初動対応が思うように進まなかったという説明があった。こうした経験を踏まえ、現在では職員がマネジメントに専念できるよう、アウトソーシングできる業務は外部に委託し、他の事業体と連携しながら、その上で情報を一元化する体制整備に努めている点は大いに参考となるものであった。給水車の増強や、貯水機能付き給水管の整備、マンホールトイレの計画的な整備など、災害時の生活を支える備えが少しずつ積み重ねられている。</p> <p>八王子市においても、災害時に何ができるのか、どこまでを自前で備えておくべきかを改めて検討する必要があると感じた。熊本市の取組は、災害対応を「特別なこと」ではなく、日常の事業運営の延長として考えていくことの重要性を示すものであると考える。</p>
視察の様子	



熊本市 市議会棟の前で

詳 細	
視察日及び視察先	1月15日(木) フードパル熊本(熊本市)
視 察 内 容	フードパル熊本の取組について
概 要	<p>フードパル熊本は、1997(平成9)年にオープンした、日本初の「生活者交流型食品工業団地」であり、工場見学や体験、販売、イベントなどを通じて、企業と消費者を直接つなぐことを目的として整備された施設である。熊本市が主導して造成され、当初は12社が立地した。</p> <p>その後、経済環境の変化などあり、入居企業のうち半数が撤退・倒産するなどの時期も経験したが、現在は、当初の事業主体である協同組合フードパル熊本から事業譲渡された株式会社フードパルが運営主体となり、残った企業や新たに参入した企業とともに施設の運営が続けられている。開業から約30年が経過し、これまでの来場者数は累計2,000万人を超えている。</p> <p>敷地内では、工場見学や製造体験の受け入れのほか、バラ祭りやフリーマーケットなどのイベントも定期的開催されており、年間を通じて地域住民や来訪者が集う場となっている。また、小学生の社会科見学の受け入れや、障害者施設や地域団体によるイベント利用など、産業拠点であると同時に、地域に開かれた交流の場としての役割も担っている。</p>
所 感 等 (意見・課題・ 本市への反映など)	<p>“フードパル熊本”の敷地内には「熊本市食品交流会館」という市の施設があり、今回はその会議室で説明を伺った。会議室やパーティールーム、多目的ホール、イベント広場を備えたこの施設と、約25万㎡の広い敷地に整備された無料駐車場を見て、ここが「人が集まること」を前提とした拠点として、十分な基盤を持っている場所だと感じた。</p> <p>説明の中では、行政主導で「交流型の食品工業団地」という先進的な構想のもとにスタートし、その後、時代の変化の中でさまざまな工夫や見直しを重ねてきた歩みについて、率直な説明がなされた。現在では、工場見学や体験学習、小学生の社会科見学、フリーマーケットやバラ祭りなどのイベントを通じて、地域の人々が自然に集う「場」として定着している様子であった。障害者施設や保育園、地域団体の行事にも活用されているという点からも、産業施設でありながら、地域に開かれた拠点としての役割を果たしていることが伺える。</p> <p>これまでの試行錯誤を経て、約30年にわたり活動が続いてきたという事実そのものに、ひとつの価値があるように感じた。すでに施設や空間の基盤は整っており、今後は、どのような企画や人の流れを生み出していくかによって、フードパル熊本は、まちづくりや地域のにぎわいづくりに、さらに大きな役割を果たしていく可能性を持っていると考える。</p> <p>八王子市においても、オープンファクトリーや産業と市民をつなぐ取組を考える際に、「理念の魅力」と「継続できる運営」のバランスをどう取るのかという点で、フードパル熊本の歩みから学べることは多いと感じた。</p>

視察の様子



熊本市食品交流会館



フードパル熊本のゲート前で



杉養蜂園 工場見学入口

詳 細	
視察日及び視察先	1月16日（金）熊本地震震災ミュージアムK I O K U（熊本県）
視 察 内 容	熊本地震震災ミュージアムK I O K Uの取組について
概 要	<p>熊本県では、2016年に発生した熊本地震の記憶や教訓を後世に伝承し、今後起こり得る大規模災害への備えにつなげることを目的として、県内各地に点在する震災遺構や拠点をめぐるフィールドミュージアム「熊本地震 記憶の廻廊」の取組を進めている。その一環として、熊本市と南阿蘇村の2か所に中核拠点を整備しており、熊本地震震災ミュージアム K I O K U は、そのうち体験・展示機能を担う施設として、旧東海大学阿蘇キャンパス跡地に令和5年7月に開館した。</p> <p>この施設にはシアタールームや3つの展示室等が整備されており、熊本地震の被害の状況、発災のメカニズム、復興の歩みなどを、映像や模型、実物資料等を通じて分かりやすく伝えている。また、熊本地震によって生じた断層や被災建築物などの実物を保存・展示することで、震災を自分事として捉えられるような構成となっている。さらに、熊本地震を実際に経験した語り部による案内や、教育旅行・防災学習プログラムの受け入れなども行っており、展示にとどまらず、人を通じた記憶と教訓の継承にも力を入れている。</p> <p>今回の視察では、こうした熊本地震の経験と教訓をどのように整理・発信し、次世代へ継承していく仕組みとして構築しているのか、また、防災教育や人材育成とどのように結びつけて運営されているのかを把握することを目的として、K I O K U の取組について視察を行った。</p>
所 感 等 (意見・課題・ 本市への反映など)	<p>熊本地震震災ミュージアム K I O K U に近づくにつれて、地表に沿って大きく羽を広げたような独特の建物の姿が目に入ってくる。湾曲しながらのびやかにつながる屋根は、抑えた色合いの外壁にやわらかさを加えており、とても印象的である。順路に沿って進むと、まず目に入るのが、地震によってひしゃげた橋の鉄骨である。大きく頑丈そうに見える構造物が、いとも簡単に変形している姿は地震の力の凄まじさを突きつけてくるものであった。その先のシアタールームで観た約10分間の映像は、熊本地震が当時の人々にもたらした戸惑いや不安、悲しみの大きさを改めて実感させる内容であった。</p> <p>さらに、地域の立体地図などを用いて地震が起こる仕組みを解説する展示を見た後、いったん建物の外に出て、旧東海大学阿蘇キャンパス跡地と地面に刻まれた断層の現場へと向かう。保存処理を施したうえで、被災当時の姿をそのまま残した建物や断裂した地面を目の前にすると、展示や映像で見てきたものが、あらためて現実として迫ってくる感覚があった。K I O K U は災害の記憶を知識として伝えるだけでなく、体験の流れの中で「自分事」として受け止めてもらうことを強く意識した施設だということが実感できた。</p> <p>八王子市における災害の記憶や教訓を、資料として残すだけでなく、実感を伴う形で次の世代に伝えていくことの重要性を改めて考えさせられた視察となった。</p>

視察の様子



震災遺構 数鹿流崩れ跡



語り部の方から話を聞きながら



土砂につぶされた車



熊本地震震災ミュージアム KIOKU 前にて